

「管理の二重性論」批判と商品の物神性論

“The Theory of the Two-Fold Character of Control” and the Fetishism of Commodities

篠原 三郎
Saburo SHINOHARA

Abstract

This paper aims to criticize so-called “the theory of the two-fold character of control” which argues that labour-process in capitalistic production-process exists independently of the social and historical form.

I revise the weakness of the theory with respect to the two factors of a commodity, the form of value and the fetishism of commodities in Marx's “Capital”.

まえがき

1. 「管理の二重性論」の問題点
2. 「管理の二重性論」批判
3. 価値形態論における使用価値形態
4. 使用価値形態と物神性

あとがき

まえがき

資本主義的管理の本質をいかに規定していくかは、管理論の研究にとってきわめて重要なことである。その有力な通説に「管理の二重性論」がある。しかし、通説には問題を感じ、疑問をもっている。それゆえ、かねてより、「管理の二重性論」批判を繰り返してきたところだが、そして、現在も、私見の妥当性を基本的に支持しているが、同時に、自説の不備についても気づいている。

本稿は、したがって、その後、学んできた諸研究⁽¹⁾に励まされつつ、また、それをふまえて再論しようとするものである。管理の本質規定のあり方は、現代の管理現象の考察にとって大きな影響があると思われるからである⁽²⁾。それは、同時に、これまでの私見における不明確さを克服して

いくものでもあるからである。

なお、上に述べたような、さらに越えていかなばならなかった問題の一つに、『資本論』での価値形態論があった。これをめぐっては、本稿後半で取上げられる永谷清氏の研究^③によりながら、展開されることを、あらかじめ指摘しておきたい。

以上のことでほぼ分かるように、本稿では、「管理の二重性論」と商品の価値形態論との関わりが、主として、念頭におかれながら展開されていくであろう。それは、「管理の二重性論」の労働過程の性格規定の方法と深く関かわるのが商品の二要因論、その理解の鍵となるのが価値形態論、さらには、物神性論であるからと考えるゆえである。

1. 「管理の二重性論」の問題点

いわゆる管理の二重性論は、一般に、『資本論』の第3巻第5篇におけるつぎの叙述に依拠している。資本主義的管理の本質を的確に捉えている箇所としてしばしば紹介されているところである。

「監督や指揮の労働は、直接的生産過程が社会的に結合された過程の姿をとっていて独立生産者の孤立した労働としては現われない場合には、どこでも必ず発生する。しかし、この労働は二重の性質のものである。

一面では、すべての多数の個人が協業する労働では、必然的に過程の関連と統一とは一つの指揮する意志に表わされ、また、ちょうどオーケストラの指揮者の場合のように、部分労働ではなく作業場の総活動に関する機能にも表わされる。これは、どんな結合的生産様式でも行われなければならない生産的労働である。

他面では——商業的部門はまったく別として——このような監督労働は、直接生産者としての労働者と生産手段の所有者との対立にもとづくすべての生産様式のもとで、必然的に発生する。この対立が大きければ大きいほど、それだけこの監督労働が演ずる役割は大きい。それゆえ、それは奴隷制度のものでその最高限に達する。しかし、それは資本主義生産様式でも欠くことができないものである。なぜならば、この生産様式では生産過程は同時に資本家による労働力の消費過程だからである。それは、ちょうど、専制国家では政府が行なう監督や全面干渉の労働が二つのものを、すなわちすべての共同体の性質から生ずる共同事務の実行と、民衆にたいする政府の対立から生ずる独自の機能との両方を包括しているようなものである^④」。

このようなマルクスの所説によって、一般に管理の二重性論が導き出されている。たとえば、その代表的な論者である角谷登志雄氏は、うへのマルクスの所説を採用され、それにそくして管理の二重性論をつぎのように展開されている。

「みられるように、マルクスは、資本主義的生産様式における企業の『監督労働』ないし『指導労働』いいかえれば管理機能が、二重性格を持つことを明確に示している。すなわち、その一つの面は、すべての生産様式に共通するところの、結合された社会的労働の本性から生ずる一般的

機能であり、他の面は、生産手段の所有者と労働力の所有者との階級的対立から生ずる特殊的機能——資本主義的生産様式のもとにおいては、資本による労働力の搾取と労働者の抑圧の機能を表現する——という側面である。いうまでもなく、このような資本主義的管理の二重性は、労働の二重性、その具体的展開過程としての資本主義的生産過程の二重性——労働過程と価値形成過程ないし価値増殖過程——、に基礎づけられる。したがって、資本主義的管理は、労働過程的側面と価値増殖過程的側面とのそれぞれの側面に規定されるわけであり、いま、前者を管理の一般的規定、後者を歴史的規定と呼ぶならば、資本主義的管理は、これら両規定の統一のうえに把握されなければならないのである。いいかえれば、それは、その対象としての作業との関連において、対立物の統一＝闘争という敵対的矛盾の一契機として、把握しなければならない⁽⁵⁾。

管理の二重性についての考え方は、論者によって表現上の違いこそあるにしろ、角谷氏のようなそれが、一般的のように見受ける。その叙述と論旨がもっともよく整理されているという意味では、通説の代表である。しかし、通説だからとはいえ、疑問がないとはいえない。

かつて繰り返し、私見が取上げてきたように、氏のように、管理の「一般的規定」と「歴史的規定」の「統一のうえに把握されなければならない」とのべられても、それは、具体的に、いかなることを意味しているものなのか、よくつかめないのである。

そもそも、歴史的な規定を受けていない「労働過程的側面」など現実にありうるのだろうか。「価値増殖過程的側面」を他面にもちながら、社会関係にかかわらない一面の「労働過程的側面」など現実にありうるのだろうか。あるのは、資本主義的（あるいは、価値増殖過程的）「労働過程的側面」でしかないのである。管理論研究の課題は、なにより「労働過程的側面」の、そのような歴史的な性格こそ現実的に解明すべきことではないのではなかろうか。一面の過程も、他面の過程も、管理における同一過程の二側面なのであるから。

現に多くの研究者によって実際に展開されている、もろもろの管理論や管理論史とか、管理史研究の成果をみれば、それらはみな、管理の「労働過程的側面」の歴史的特徴を具体的に解明している仕事であるといえるのではなかろうか。また、そのような作業をしなければ、「価値増殖過程的側面」でさえ認識できないのではなかろうか。

わたくしが管理の二重性論の通説に疑義をもったのは、そのことである。

このように現実の管理は「価値増殖過程的側面」であれ、「労働過程的側面」であれ、歴史的な性格をもつものである。けれど、管理の「一般的規定」、ないし、歴史貫通的規定が不要であるといっているのではない。それどころか重要なのである。「一般的規定」の想定なくして「歴史的規定」などありえないのである⁽⁶⁾。それは、たとえば、マルクスの叙述にしたがえば、先に引用した文中の「一面では」でのべられている、そして、角谷氏にまさに「一般的規定」といわれているそれらが「一般的規定」となるものではなかろうか。

そのような、歴史貫通的に規定される管理にも、——資本主義的管理に「価値増殖過程的側面」と資本主義的「労働過程的側面」があったように、しかしそのような歴史的形態はすでに捨象されているのだが、——量的側面（ないし、過程）と質的側面（ないし、過程）の二側面（ないし、

過程)が考えられる。これが「一般的規定」としての管理の二重性である。

しかし、現実レベルの管理は、すでに繰り返し指摘してきたように、歴史的形態をとった管理の二重性として存在している。資本形態(ないし、資本関係)に規定された管理の「労働過程的側面」と「価値増殖過程」の二重性としてある。

ところが、通説では、角谷氏にみられたように、管理の量的側面と質的側面の区別がなく、前者の現実形態である「価値増殖過程的側面」が「歴史的規定」とされ、後者の現実形態である資本主義的「労働過程的側面」の存在にたいする確かなる分析がされないままに、質的側面は歴史貫通的な一般的なものとして規定されてしまっている。そして、そのような「一般的規定」としての「労働過程的側面」と「歴史的規定」としての「価値増殖過程的側面」との統一的把握が管理の二重性と規定されることになる。これでは、「労働過程的側面」の歴史認識など、理論的に問題となりえなくなってしまう。

2. 「管理の二重性論」批判

前節でみてきたような通説の誤りは、論者の責任だけでなく、マルクスの所説にも問題があったように思われる。さきに引用した『資本論』の「監督労働」、ないし、「指導労働」にたいする二重性論をみれば、「一面」においての規定は、角谷氏の「一般的規定」に該当するし、「他面」での規定は、「歴史的規定」となっているからのようである。そうならば、「労働過程的側面」の歴史的特徴の認識は、結局、欠落するようになる。

「監督労働」などに対するマルクスのような監督の、あるいは管理の二重性認識が生まれてくる原因は、考えてみれば、実は、さらに遡れるようである。それは、マルクスが「商品そのものが使用価値と価値との統一であるように、その生産過程も労働過程と価値形成過程との統一でなければならない⁽⁷⁾」と述べているように、また、それをふまえて角谷氏も書いているように、資本主義的生産過程の二重性(したがって、そこに生じる管理の二重性)論の淵源が『資本論』冒頭の商品論のあり方にもたどれるのである。周知のように、マルクスは、使用価値と価値という商品の二要因について次のように説明している。

「使用価値は、富の社会的形態がどんなものであるかにかかわりなく、富の素材的内容をなしている。われわれが考察しようとする社会形態の場合には、それは同時に素材的担い手となっている——交換価値の⁽⁸⁾」といい、「使用価値としては、諸商品は、なによりもまず、種々に違った質であるが、交換価値としては、諸商品はただ種々に違った量でしかありえないのであり、したがって1分子の使用価値もふくんではないのである⁽⁹⁾」と、使用価値と価値の相違を強調している。

そのことはそれとして、一見、納得できるかのようだが、その説明のなかで使用価値が「富の社会的形態」ないし「社会形態」にかかわりはなく、「富の素材的内容」のみ位置づけられている点には、疑問を感じないわけにはいかないのである。

確かに、使用価値にかんしては、「或る一つの物の有用性は、その物を使用価値にする⁽¹⁰⁾」として認識され、他方の「交換価値は、まず第一に、或る一種類の使用価値が他種類の使用価値と交換される量的関係、すなわち比率として現われる⁽¹¹⁾」ものであり、両者は相異なるものであるけれど、後者は、いうまでもないことであるが、前者については「社会的形態」、「社会形態」とかかわりないものといいうるであろうか。「交換価値」の「素材的担い手」としてのみ捉えていいのであろうか。

さきにみてきた資本主義的生産過程の二重性の「価値増殖過程的側面」は歴史的、「労働過程的側面」は一般的という、例の形式的な振り分けと共通しているのに気づくのである。

使用価値が「社会形態」とかかわりのある「交換価値」の「素材的担い手」となれば、少なくともそれだけで済まされず、「交換価値」であることによる規定を受けざるをえないはずである。したがって、「商品を生産するためには、彼は使用価値を生産するだけでなく、他人のための使用価値、社会的価値を生産しなければならない⁽¹²⁾」と、マルクスはのべてもいるわけだが、一方で、「交換価値」であることは、他方の使用価値は、じつは「他人のための使用価値」でなければならないのである。それも、たんに「他人のため」なのではなく、交換がおこなわれ、売れなければ、「他人のため」になれない性格のものなのである。

ともあれ、その「物の有用性」は、交換関係のなかで認められないかぎり、商品の使用価値となりえぬわけで、使用価値とにいえるためには、まず、社会関係としての使用価値形態に位置づけられていなければならない。そういうなかで、物としての使用価値が社会的に認定され、規定されていくものと考えられる。関係としての使用価値形態と、その契機となっている使用価値となる物とは区別されるべきものなのである。使用価値は、単純に「交換価値」の「素材的担い手」となっている訳でなく、「素材的担い手」自身がまず交換という社会関係のもとにおかれていることを看過すべきでない。ということは、商品の、使用価値となる物の社会的規定性の意味を明確にしておく必要があるということである。商品の使用価値をめぐる社会性が見のがされてきたために、商品論自体にも不十分さを残す結果ともなり、また、結局、資本主義的生産過程の、したがって、「管理の二重性論」が問題をかかえたまま今日にいたってしまっているのである。

資本主義的生産過程は、商品として買入れた生産手段と労働力によって新しい商品を生産していく過程である。社会関係としての資本形態に規定されながら、生産が行なわれる。生産過程の労働過程的側面も、新しい商品の使用価値も、資本主義的である。

マルクスの商品論上の問題の根は深い。したがって、その問題点を克服せんとする営みも後を絶たない。その優れた研究に学びながら、その一つを紹介しつつ、使用価値や労働過程の社会性問題をあらためて、さらに考えていきたい。

3. 価値形態論における使用価値形態

『資本論』の方法がもっとも特徴的に展開されているところの一つが、商品論における価値形態

論である。しかし重要な箇所であるにもかかわらず、不明確さを抱かえ込まざるをえなかったのも、この箇所の事実であろう。そのマルクスの所説のもっている問題点を批判的に検討されながら、より十全なものに価値形態論を展開すべく、一貫して取り組まれているのが、「まえがき」であげさせていただいた永谷清氏の仕事ではなからうか。

そこで、つぎに、それによりながら、前節で述べてきたような問題にかかわらせて、しかも多分に自説に引き寄せて、氏の所論を紹介していきたいと考えている⁽¹³⁾。

永谷氏は、価値形態論の意義を以下のように説明されている。

「商品とは抽象的には、内的に価値と使用価値の二要因をもつことによって商品といってよいが、具体的に商品たることを示すためには、対極的な二商品の交換関係において、価値形態と使用価値形態をとることによって、示す以外にない。つまり商品形態とは、相対的価値形態にあるか、等価形態のどちらかにある形態で示すしかない。同時にどちらの形態にもあることはできず、また他方なしに一方の形態であることもできない。商品形態は、すべての商品が同時に一樣である形ではありえないのであって、相対的価値形態と等価形態との二極に分裂し、しかも対応しあってしかありえないのである。商品形態の必然的な二極性を示すことこそ、価値形態論の意義といってよい⁽¹⁴⁾」。

したがって、「商品は直接的に見れば使用価値あるいは物であるが、それでは商品の使用価値とはいえない。商品の使用価値であることを示すには、価値表現の対極的な二商品関係の中において、対極的な使用価値形態のどちらかをとり以外にない。……（中略）……マルクスは使用価値形態を現物形態 Naturalform とすることによって、二つの使用価値形態のどちらも、またその対極性も不明確にしてしまっている⁽¹⁵⁾」と、永谷氏はいわれる。

このように、使用価値は、単純に、その「交換価値」の「素材的担い手」となっているわけではないのである。『資本論』にいう、いわゆる「単純な、個別的な、または偶然的な価値形態⁽¹⁶⁾」に例示されているような「20 エルのリンネルは1 着の上衣に値する」という関係のなかで具体的に存在しているのである。

しかるに、周知のように、この単純な価値形態から、商品の交換関係が「全体的な、または展開された価値形態⁽¹⁷⁾」、「一般的価値形態⁽¹⁸⁾」へと、（途上の諸論点は省略するが）展開されていくと、とくに、「一般的価値形態になると、相対的価値形態に立つ機会の多い商品と等価形態に選ばれる機会の多い商品との差別が生じているが、けっしてどの商品もどちらかの形態の位置に固定化されてしまうことはありえない⁽¹⁹⁾」と、永谷氏は理解されたうえで、一般的価値形態と、つぎの段階にあらわれる「貨幣形態⁽²⁰⁾」とは、「マルクスの考えとは反対に⁽²¹⁾」質的に違った段階の形態のものと位置づけ、そのことを、氏は、強調されるのである。そのことの意味を知るために、氏の説明をもう少し紹介させていただきたい。

「単純、拡大、一般の価値形態の展開では、使用価値で価値を表現する際、等価形態の商品の使用価値に対する価値表現者の欲望が前提とされた。しかし貨幣形態での価値表現では貨幣形態の全商品の使用価値に対しては、欲望の完全な捨象が成立している。……（中略）……貨幣形態で

は相対的価値形態と等価形態の絶対的な固定化が起り、直接的交換可能性は金の物的属性として現われる⁽²²⁾。『マルクスが単純な価値形態の等価形態で指摘した Naturalform が価値形態になる、という関係はここで初めて成立する。これによって等価形態は金商品の独占となり、諸商品は生まれながらに相対的価値形態にしか立てないものとして現われる⁽²³⁾』。

このように、また、わたくしたちが日常に身近にみられるごとく、商品の価値表現は、貨幣による価格表示の形式でおこなわれるようになる。ここでは、永谷氏が述べていたように、『貨幣形態の金商品の使用価値に対しては、欲望の完全な捨象が成立している』。たとえば、リンネルの価格は、いくらなら売れるだろうかという、商品所有者の「主観的行為⁽²⁴⁾」である判断を介して表示されるようになる。さらに、この段階で考えられることは、このことは永谷氏が特に述べていることではないが、商品所有者はやはり「主観的」に、その物をリンネルという使用価値であると自己主張できる事態にも達しているといえるのではないか、ということである。したがって、新しい商品も、容易に登場しやすい客観的事態になってくるということである。

つまり、商品の二要因が等価形態と相対的価値形態という対極的な関係のなかでしか、具体的には存在しえなかったはずの商品関係の社会的痕跡が消えて、リンネル自体の物的属性として価値がみえ、また、使用価値が物自体として現われてくるのではなからうか。また、商品が使用価値と価値の二要因からなると抽象的に規定されるのも、この段階の認識にかかわってなされたものではなからうか。したがって、単純な価値形態ではみられたような商品所有者の欲望や、等価形態に立つ買い手の関心がなければ、成立しないし、また、実現しえなかったという商品関係の社会的条件もみえなくなってくる。商品の価値も、使用価値も、その社会関係としての形態の物神化にともない、物の自然的属性となってしまうのである。

したがって、商品の使用価値は、単純に、「交換価値」の「担い手」とはいえない関係にあるとみることができる。先にみてきた「管理の二重性論」の誤りの原因も、このように溯ってみれば、商品形態の使用価値の社会性をみない、それゆえ、資本形態の労働過程の社会性をみない物神性に囚われたところにあるといえよう。

4. 使用価値形態と物神性

『貨幣形態』の段階ではこのように、商品の使用価値は、有用性をみだすたんなる物と規定され、それをめぐる社会性がみえなくなっている。使用価値の物神性が成立しているのである。

したがって、宇野弘蔵氏は、『商品生産の物神崇拜的性格⁽²⁵⁾』に言及してつぎのように述べているが、しかし、そこでの使用価値をめぐる叙述には疑問を抱くのである。

「常識的にはもちろんのこと、多くの経済学者も商品に対して、その価値は商品がそれ自身に有する物質的性質によるものとし、その使用価値はむしろ商品に対するわれわれの欲望によるものと理解するのであるが、それはまったく顛倒した幻想に外ならない。いかにも商品の使用価値はわれわれの欲望の対象にはなるが、しかしそれは商品の物質的性質を外にしてあるわけではな

い⁽²⁶⁾」。

たしかに、使用価値は、「商品の物質的性質を外にしてあるわけではない」が、しかし、それは、「われわれの欲望の対象に」なってはじめて存在しうるものであって、「われわれの欲望」の、使用価値に対する関わりは、「顛倒した幻想」とはいいいきれない。繰り返し前節でのべてきたように、使用価値は、社会関係としての商品関係においてこそ具体的に問題となってくるものである。等価形態に立つ商品にたいする商品所有者の欲望を前提にして考察してきたはずである。それどころか、それを欠いては、価値形態論の十全な展開も難しかったはずである。にもかかわらず、使用価値の「物質的性質」に固執することとなれば、それは、「貨幣形態」段階における物神性の世界でものをみていることになるのではあるまいか。

ところで、「われわれの欲望」は、抽象的なものではなく、社会的歴史的なものである。廣松渉氏が語っているので、ここでは、それを援用しておきたい。

『「使用価値」という契機ですが、……（中略）……正しくは、この使用価値からしてそもそも社会的歴史的な形象であることを看過できません。例えば、石器や弓矢のごときは今日私どもにとってもはや使用価値ではありませんし、テレビや飛行機のごときはつい先頃まで使用価値ではありませんでした。使用価値は『人間の何らかの諸欲望を充たす有用性』だとは申せ……（中略）……欲望そのものが歴史的・社会的に規定されており、一種の文化的形象であります⁽²⁷⁾」。

したがって、廣松氏は、当然のことだが、つぎのようにも述べているので、補足しておきたい。

「使用価値としての商品においては、もっぱらその有用性が問題なのであって、それが“物存在”としていかなるものであるか、それが物理・化学的にいかなるものであるかということは、それ自体としては問題ではありません。……（中略）……正確に言えば、材質、質量、形状、等々が、ここでは“物存在”の性質としてではなく、それ自身、有用性の契機として、その限りでのみ、問題になるのであります⁽²⁸⁾」。

このように、使用価値は、社会関係としての商品関係との関わりでこそ捉えていくべきはずのものである。しかし、すでに考察してきたように、「貨幣形態」が支配している商品の社会では、商品の交換関係にみられた社会的歴史的な商品所有者の諸欲望は捨象されていき、したがって、価値形態や使用価値形態にかかわる社会性も消え去ってゆき、その社会性は、その物の「物質的性質」、「“物存在”的性質」の属性となってあらわれるようになっていく。物神の支配する社会ができあがっている。そうだとすると、宇野氏のように使用価値についての「物質的性質」の強調に向っていくのであれば、繰り返すことになるが、それは、まさに、商品の物神性に囚われた認識に近づくことになっていくことになるのではなからうか。

ところで、使用価値の「社会的歴史的な形象」を指摘されていた廣松氏も、しかし、「商品は単なる使用価値ではなく、商品としての商品にとって、使用価値は、さしづめ『交換価値の質料的担い手』たるにすぎません⁽²⁹⁾」と述べることになるのだが、このような認識になってしまった原因は、すでに繰り返し主張してきたところの使用価値の社会性をめぐる物神性論にかかる関心に不十分なところがあったからではなからうか。

あとがき

『資本論』が問われるどの問題もその原因を溯れば、第1巻の第1, 2篇の展開のあり方に関わることは、しばしばみられることだが、第3巻第4篇上に出てくる「管理の二重性」問題についても、そういえるようだ。

その意味では、永谷清氏の意欲的な研究には、すでに紹介してきたところからでも分かるように、示唆されることがきわめて多かった。

最後に、また、これまでの私見の掘り下げにとって参考となった丸山圭三郎氏の物神性論、つまりフェティシズム論に対する考え方を付け加えておきたい。

「こうした見方（従来の経済学におけるフェティシズム観……篠原）だけでは、フェティシズムのメカニズムが解明されていない。つまりマルクスの『価値形態論』を貨幣の起源論として読む重大な視点（柄谷行人氏）が欠落しているのではないだろうか。……（中略）……価値とはフォームであり関係である。しかし関係の体系があるところへ一つの中心として貨幣が登場すると、その中心化によってそれぞれの商品があたかも個としての実体として存在するかの如き錯覚が生れ、関係性が隠蔽されて個々の商品が実体的・自存的価値を内在させるように見えてくるメカニズムこそ、フェティシズム成立の最大の原因なのではあるまいか⁽³⁰⁾」。

(1997年8月1日)

注

- (1) いくつか紹介させていただきたい。

永谷 清『科学としての資本論』、弘文堂、1975年。

柄谷行人『マルクスの可能性の中心』、講談社、1978年。

廣松 渉『物象化の構図』、岩波書店、1983年。

丸山圭三郎『文化のフェティシズム』、勁草書房、1984年。

- (2) 「管理の二重性論」と「現代管理批判」の関わりについては、さしあたり、次の論稿を参照されたい。

中村共一「過剰労働論、その覚書——現代管理批判の視座転換に向けて——」、『岐阜経済大学論集』第31巻第1号、岐阜経済大学、1997年。

- (3) ここでは、二点、あげておく。

永谷 清「価値形態論の偉力」、『信州大学経済学論集』第33号、信州大学、1995年。

永谷 清「価値形態論と物神性論——宇野経済学対廣松物象化論——」、『思想』875号、1997年。

- (4) K. Marx, Das Kapital, Dritter Band, Dietz Verlag, Berlin, 1953, SS. 418~419. (『資本論』第3巻第3分冊、マルクス＝エンゲルス全集刊行委員会訳、大月書店、1968年、84~85ページ)

なお、同じ主旨の叙述は、第1巻第4篇にもある。

- (5) 角谷登志雄『経営経済学の基礎——労働管理批判——』、ミネルヴァ書房、1968年、50~51ページ。

- (6) 私見が資本主義的労働過程ということに関わらせて、その「一般的規定」なるものを述べたことに対して小野隆生氏から、以下のような意見をいただいている（「現代企業の構造変化と歴史認識——企業『批判』を超える——」、『情報問題研究』第9号、情報問題研究会、1997年、19ページ）。

「そこには、何らかの形で『資本の論理が貫徹しない』側面を持ち込んで、それを自分の価値観を入

れておく器にしようという意図があると言わざるを得ない。これは、社会科学における道徳論的傾向とそれに立脚した企業『批判』のなごりである」。

私見のどこが原因で誤読されたのか自覚できずにいるが、本文を虚心に読んでいただいて、誤解であることに気づいていただければ幸いである。

ちなみに、山口正之氏の所説に対比しつつ、私見を検討されておられるが、山口氏のいう歴史貫通的な労働過程規定と、私見における「一般的規定」とは、まったく異なるものである。

なお、資本主義的労働過程論にたいする小野氏の評価については歓迎している。

- (7) K. Marx, *Das Kapital*, Erster Band, Dietz Verlag, Berlin, 1953, S. 195. (『資本論』, 第1巻第2分冊, マルクス＝エンゲルス全集刊行委員会訳, 大月書店, 1961年, 74ページ)
- (8) K. Marx, a. a. O., S. 40. (邦訳, 第1巻第1分冊, 69ページ)
- (9) K. Marx, a. a. O., S. 42. (邦訳, 第1巻第1分冊, 72ページ)
- (10) K. Marx, a. a. O., S. 40. (邦訳, 第1巻第1分冊, 68ページ)
- (11) K. Marx, a. a. O., S. 40. (邦訳, 第1巻第1分冊, 69ページ)
- (12) K. Marx, a. a. O., S. 45. (邦訳, 第1巻第1分冊, 77ページ)
- (13) 本稿では、注(3)に掲げた永谷清氏の論文「価値形態論の偉力」を中心にあげていきたい。なお、わたくしの主観的な読み方、受けとり方にしたがって氏の所説を紹介していくため、歪曲に通じかねないことも起きているかもしれないので、氏の論稿を直接参照されることを望みたい。
- (14) 永谷 清「価値形態論の偉力」, 58ページ。
- (15) 永谷 清, 前掲論文, 58ページ。
- (16) K. Marx, a. a. O., S. 53. (邦訳, 第1巻第1分冊, 90ページ)
- (17) K. Marx, a. a. O., S. 68. (邦訳, 第1巻第1分冊, 114ページ)
- (18) K. Marx, a. a. O., S. 70. (邦訳, 第1巻第1分冊, 118ページ)
- (19) 永谷 清, 前掲論文, 62ページ。
- (20) K. Marx, a. a. O., S. 75. (邦訳, 第1巻第1分冊, 126ページ)
- (21) 永谷 清, 前掲論文, 63ページ。
- (22) 永谷 清, 前掲論文, 63ページ。
- (23) 永谷 清, 前掲論文, 62ページ。
- (24) 永谷 清, 前掲論文, 63ページ。
- (25) 宇野弘蔵『経済原論 I』(宇野弘蔵著作集, 第1巻), 岩波書店, 1973年, 106ページ。
- (26) 宇野弘蔵, 前掲書, 106ページ。
- (27) 廣松 渉, 前掲書, 176～177ページ。
- (28) 廣松 渉, 前掲書, 160～161ページ。
- (29) 廣松 渉, 前掲書, 161ページ。
- (30) 丸山圭三郎, 前掲書, 39ページ。